

国に散った同窓生がその時以来の再開の場であり、この会合は弥栄同窓会発足準備会だったので。この準備会で海老名氏は委員長に選任され、翌五十五年一月二十七日、花巻市花巻温泉で設立総会を開催したので。在満時代の教師五人をお迎えして弥栄同窓会が発足し、会長に海老名氏が就任しました。会の発足の推進役は小林隆興氏、畠山久耕氏が四方先生の御意志を承り、円滑に勤めてくださいました。

昭和六十一年、弥栄同志会と弥栄同窓会との一本化について、弥栄会の総会で要望がありました。同志会は寄る年波で会員が減少し、このまま推移すれば会は消えてしまう状況にあり、同窓会を解散して一本化しようと言う提案でした。これに対し海老名氏は「同志会、同窓会の一本化は時代の流れにしたがって、いずれは合流することは当然。しかし同窓会の発足は、先生と生徒の温かい指定のつながりと親睦を目的に自発的に創った」ものであるから今後同窓会活動は続ける」と発言され、解散せずに同窓会と合流し、以後「彌栄会」として発展してきております。同窓会長と

しての強い信念の表れと申せましょう。

現在、海老名氏は弥栄会副会長の役にあり、弥栄国民学校同窓生で引揚げ途中で死亡した人や、日本に帰り着いた後、消息不明の人など会員の把握確認の大変な事柄を精力的に努めておられます。弥栄会の今後の発展には海老名氏の盡力は不可欠なのであります。

(彌栄会副会長 小野塚 芳一)

私の歩んだ開拓の道

茨城県 仲野 みよ子

戦後五十年いろいろな思い出とともに時は過ぎ去りました。私は、昭和二年東北の寒村に五人兄妹の末っ子として生まれました。

父は土地の者ではなく、八歳ごろより作男として他人の家で苦勞して働き、学校に行かせるという約束も守ってもらえずに、学校には半年ほど休みながら行っただけで、仕事に追われる毎日だったとか、日ごろ無

口な父が晩酌の少しの酒に酔い、生い立ちを聞かせてくれました。

母もおしんを地で行くような、金になるならと親兄弟のため、長女として奉公先を転々としながら働いたそうです。十七歳で父と結婚するまで小さいころは子守などやり、その後はこの地方で盛んなった機織りの仕事についていたようです。私が小さかったころ母は、そのとき習った機織りで、蚕を飼い糸を紡ぎ、父が着る紋付きなど織って作っておりました。満州に行くとき決まってから母は一生懸命、娘が嫁に行くときに持たせるんだと、冬の寒い中指先だけ切り取った手袋をつけ織ってくれました。白生地のまま一疋(二反)を一巻として織り八反分ぐらいを、渡満したとき持って行きました。

しかし、終戦後それも非難途中持ち出した荷物と一緒に捨てることになりました。

何のゆとりもない中、あまり丈夫でない父と母が田畑もなく、その日その日の仕事に精を出し、子供を育てるために、大変な苦勞をしたことと思います。その

ため長兄は父と共に炭焼きをしたり、元山もとやまといって、材木の伐り出しの仕事しごとを小学校を卒業するころからやっています。

長兄は、勉強が好きだったようで、毎日山仕事の籠の中にはノートや本が入っていたことを思い出します。学校に行きたくてもおいそれとは行かれない時代でした。

次兄は、小学校も卒業せぬ前から東京向島の指物大工に弟子入りし、義務教育だけは終え、そのまま修業し、徴兵検査後一年のお礼奉公を勤め、その後、職人として一人前の仕事ができるようになったそうです。

三兄は父と仕事をしていたが、昭和十三年の当時、満蒙开拓義勇軍は二、三男の生きる道でした。働くにも働く所のない若者にとって、広い大陸は憧れの地でしたのでそこへ行きました。

それより先、四兄は高等科一年を出るとすぐに、東京の兄の所に指物大工に弟子入りしていました。

昭和十三年長兄は第一次弥栄村より分村のため、入植者を募集にきていた人に話を聞き、近くの人も幾人

か行くとのことで自分もここに在るよりは大陸に行き、思い切り働きたいと言い出しました。苦勞した父は真つ先に賛成しました。私もそんなに深く考えることもなく賛成でした。當時の満州という未知の世界は、山村の青少年には魅力と夢があったのでした。

長兄は年が明けた十四年一月に渡満いたしました。その秋には、満州は素晴らしい所で、農業だけでなくいろいろな仕事の者も腕を振るい得るからと、次兄と四兄も満州に行くことになりました。

そして慌ただしく一年が過ぎ、昭和十五年は日本の紀元二千六百年に当たり、戦時下なればこそ国民総動員と、国を挙げてのお祝いや学芸会でも歌や踊りで賑わいました。そんなとき、親は大変な中から、そのころ出始めたスフの着物を新調してくれて、それを着て参加したことが思い出されます。

四月になり、いよいよ渡満が決まり、学校も高等科二年は満州の学校に行くので、教科書も向こうで買った方がよいということになりました。四月中旬に出発となり、近所の人や親類や友達の皆さんに見送られ、

渡満する一行二十数人は南米沢駅から新潟へと故郷を後にしました。

新潟港から北鮮羅津港へ向かう船の中は三泊四日ほどだったと思います。

朝鮮の山々の赤さに驚きました。列車は満員の人を乗せて走り、いよいよ満州の凶憫近くになるとむせ返るようなニンニクの臭い、布団包みを背負った満人たちで、異国に來たのが身に染みしました。幅の広い列車は、大陸を北へ北へと進み、見渡す限りの広原に見えながら牡丹江・勃利を経て、目的地に近づき、ようやく千振駅に着きました。

長兄や家族を待つ団の方が、馬車を仕立てて迎えにきていました。そのとき、ちょうどあの赤い大きな夕陽が地平線に沈まんとしていました。とうとう満州に來たのだと身をもって感じたものでした。馬車に乗り、四、五頭の満馬を現地の馬夫がうまく鞭を鳴らし、掛け声をかけ、ガタガタ道を揺られながら、夕方暗くなつてから現地の開拓団に入りました。準備してくれた宿舎の中央に十間のあるオンドルの部屋に、家族ごと落

ち着きました。

次の日は団員の皆さんと初顔合わせ、次兄の嫁さんも山形で簡素な式を挙げて、家族として同行しました。家族の中には二十歳前後の娘さんもおり、独身の多い団の人たちは大変な喜びようでした。私たち学生は、団にまだ学校が無かったので、弥栄村国民学校に行くことになり、団の数人の生徒と寄宿舎に入り、初めて親元を離れて生活することになりました。

当時の生徒は八十人ぐら이었다っただでしょうか、寄宿舎が近いので昼食は寄宿舎に帰って食べました。炊事当番から小さい子の洗濯まで、班ごとの各作業にはだれかが悪いことをすれば、食事のときに正座で二時間待ち、それに日曜日（レウ）の朝の虱取りなど、今までに経験したことのない生活でしたが、時々の演芸会なども今思うと、忘れられない懐かしい思い出です。

昭和十五年、同盟国のドイツの人が学校を訪れたとき、独特のポーズで手を挙げ、挨拶したことなど今も記憶に残っています。

当時の学校では、作業が多くありました。班ごとに

皆がブルマー一枚の裸になっての作業は高等科の一、二年になる私は嫌な思いがしました。

一年間の学校生活も終わる卒業式には、父がきてくれました。善行賞として農作業用のフォークをいただいたので、父は大変喜んで方言で話していました。卒業後、私は農作業を手伝うことになり、そのころ家は水田班で稲作をしていました。直播の農法で、水を落とした水田は、川魚で白くなるほどでした。自然そのままの湿地には鴨や雁の卵があり、原野に咲く花々は夏の花、秋の花と一度に咲きほこり、見事なものでした。

昭和十六年十二月八日、日米開戦の日ですが、そのころはラジオも各戸にはなく、近所の指導員の家に行き興奮しながら聞きました。でも満州の私たちには、いつもと変わらない日が続いています。

十七年には、開拓団のホームズパン講習が開かれ、私たち三人が千振種畜場に行き、紡毛から機織りまで習ってきました。当時、開拓団も手不足とて、私も入院患者の看護をしたり、産婆の手伝いを頼まれたりし

ていました。そのころ、父母も娘だからお針ぐらいいきなくてはと心配して、団員の姉さんが教えてくださるとのこと、八キロほど離れた畜産班に泊めてもらいながら、先生の都合で一冬ほどでしたが、裁縫を習いました。

十八年の春ごろ、お針（裁縫）を習いに行ったとき、隣にいた団員の方が家に来て、私を兄の嫁にと言われたそうで、私の動物好きが望まれた原因だったようでした。その人は福島の方で、渡満するまで会津地方の地場産業の漆器の蒔絵を修行していたが大陸に憧れ、好きな畜産をやるのが夢であったとのこと、独身ながら馬・牛・豚・山羊などの家畜を多く飼育して、現地の人を雇い仲良くやっていました。今から考えると随分と早婚でしたが、そういう時代でした。数え年十八歳で十月の結婚式でした。

物不足のときでしたが、兄に湖南宮の町で、鏡台などを見付けて買ってもらいましたが、馬車に乗り嫁入りする途中で割れてしまい、「隣の小父さんが増えておめでたい」と言って慰めてくださったが、その後の

ことを暗示しているようでした。

そのうち世の中は、ますます暗い戦ばかりのニュースや、玉碎などの報道が多い時代になってきました。私どもは、四月半ばごろの土の凍結が解けるのを待ち兼ねて、小麦から蒔付けを始めました。満州の短い夏でも作物は育ちますが、雑草も負けずに伸びるので、毎日除草や家畜の世話と忙しい日が続きました。奥様気取りで現地人だけ働かせるようなことはしないで、一緒に汗を流すことが団長さんの教えでしたから、団の人は皆がよく働きました。

そのころまで、裏山に千振飛行場の航空隊が演習にきていましたが、十九年ごろになるとぼったり見えなくなり、春になると団員にも召集で入隊する人がでてきました。そのころ、私たちの所に数十頭の緬毛が導入されたので、現地の牧童を頼み、一緒に生活しながら働いていました。団の共進会には、農畜産品を出品し、私どもの豚が一等に入賞したと喜んだものでした。昭和十九年十二月には私も女兒を出産し、母が世話にきてくれ、そのときには母の子供時代のことなどい

ろいろ聞くことができました。

明けて昭和二十年五月には、主人にもとうとう召集がきて、慌ただしく東満の方面へ入隊。次第に出征家族が多くなったので、隣家の家族も私の家に越してきて、女ばかりですが共同生活をはじめ、家畜の乾草作りで夢中で草刈りをしていました。子供も寝かせっきりで、作業を終えて帰宅すると、部屋中をごろごろしていました。航空隊がこなくなつてからは、狼も家の近くまで現れるようになり、隣の開拓団では一家皆殺しにされた話を聞き、治安も悪くなつてきました。

八月十日に「根こそぎ動員」で団長はじめ、十七歳から四十五歳までの男子が召集されて行きました。その夕方、本部からソ連が参戦し危険だから、本部のある柳樹河屯に集合せよとの連絡を受けたので、急いで家畜に餌を与え、窓に板を打ち付ける仕事は、近所の五十歳過ぎの小父さんに手伝ってもらい、戸締まりをして貴重品だけ持って、雷雨後のぬかるみに足を取られながら十六キロほど離れた本部へと向かいました。

各部落から全員が集合し、子供を持たない女の人も、

その夜は銃を持ち見回りをしました。

翌日、一度各家に戻り必需品を持ってくるように言われ、家に戻った。仲良くしていた現地の人がきてくれたので、山羊などは母乳が出なくて毎日乳を取りにきていた人に渡すように頼み、豚も餌に困ると思ひ売ることにした。その日に買い手があり全部で七百元ほどに売れたので、その金がその後の避難の道で大変助かりましたが、次の日には金を出して買ってくる者はいなくなつたようです。一日ごとに緊迫した状況になつたものの、団長はじめ指導者を失つた老若女子供ばかりで、不安で心細いことはこの上ないものでした。

千振駅に行つて見たが、日本人の姿は見えぬ思案の末、団から引き揚げる決断をして、十四日に教台の馬車に、体の弱い者や老人と少々の荷物を積んで、若い者は銃を持ち出発しようとしたとき、親しかつた現地の人が餞別を持ってきて別れを惜しんでくれました。その一方では団の倉庫にある品物めがけて群衆がなだれ込み、二、三発の銃声も聞こえましたが、私どもには何の危害もなく、終生第二の故郷と定めた土地を心

ならずも離れることになり、返す返すも残念でなりませんでした。小麦も既に色付いていましたが、外は小雨が降っていました。その夜、千振小学校に泊まりましたが、しかし日本人の姿はなく、警察の人が二、三人いたようでした。あちこちで火の手が上がり、銃声がしきりに聞こえてきました。

次の日の朝、持ってきた米を炊きお握りをつくった。その時はまだ、団に帰れるような気がしていました。しかし、そんな甘いものではありませんでした。その後、生死をさ迷う筆舌に尽くせない悲惨な避難行が始まりました。汽車が駄目なら船で行くより方法がない、と依蘭まで歩くことになりました。まだその時は馬車も一緒にきてくれたが、夜になると何台かの馬車が姿を消したので、足腰の立たない人だけ馬車に乗せて、子供は背負って歩きました。

三日目の朝早く千振警察の人がきて、「そこまでソ連軍がきている、何をもたもたしているのだ」と気合をかけられ、朝飯どころではなく無我夢中で歩きました。持ってきた荷物も皆が次々に捨て、二キロぐらい

の道路には何もかも捨ててありました。そのころになると、取り残された日本人が方々から集まり数百人の集団になって、ようやく依蘭に着きました。ここも爆撃にあった様子で、大きな穴があちこちに開いていました。

十八日朝に軍人らしい人から、日本が戦争に負けたことを初めて知らされましたが、私どもの行動は変わりません。松花江を上りハルビンまで行けば鉄道も通っているだろうから、日本に帰れるんだと言って川の方へ歩きました。そのとき、飛行機に乗った男の人二、三人が棒に白布をつけて振っています。ああ本当に日本は負けたんだと実感したものです。

しばらくして突然、寺の建物のような方向から銃弾が飛んできたので、夢中で堤防へ走りしましたがあまりにも激しい流弾のため軍隊が掘ったものか、タコツボがあったので入りました。団長の奥様も一緒に二人がそっと顔を上げたところ、みんな川の方に行くので、私たちも穴を出て遮二無二走りました。ブシュ、ブシュと銃弾が砂にささる音に夢中で走り堤防の陰に

入り、しばらく歩きホツとしていたら、主人の兄の奥さんが撃たれたと聞き、先ほどまで一緒に歩いていて「何としても子供たちと主人に会わなければ」と言っていたのにと、がく然としました。戻ろうと思つたが、女では無理だと言つて、代わりに団員の方が駆けつけてくれましたが、大腿部に銃弾が貫通しており、歩くこともできず、五歳と三歳の二人の女の子のうち、上の子を連れて行つてくださいと言われたそうですが、二人共連れてきたとのことでした。義姉さんはどんなにつらい思いをしたことでしょう。

私も自分の子を背負っているのです、下の子は団の子供のない方に背負ってもらい、上の子は私が連れて歩くことになり、そのときは人のことまで思いやる心のゆとりもなく、一心でみんなにはぐれないように前へ進むよりほかなかったです。

ただ夢遊病者のように歩きながら眠り、前の人と離れないように紐で結び合い、喉が乾けば道のたまり水を飲み、腹が空けば生のトウモロコシ、時には山ブドウの茎をかじり、生きたいと思う本能のまま動いてい

たような気がします。

夜中歩いていて遠くの窓明かりなど見たときは、胸が締めつけられる思いがしました。今も胸の奥に当時の切なさが残っている気がします。

依蘭から方正まで歩く間にも、か弱い子供や老人から先に耐え切れず、多くの人が命を落としました。死骸さえも葬ることができず、畑の作物の陰や、川の流れの中に申し訳ないと思いつつも置いたり流したりしてきました。

方正を出発して二日後に、槍や大鎌を持った暴徒に襲われたとき、集団は二分され団の者も別れ、そのまま親子、兄弟、家族は離ればなれになり、一生の別れとなった人も幾人もいます。そして後に戻った団員は方正でとうとう越冬生活を送ることになりました。私は先方の組で暴民の襲撃に遭い、川に流されそうになりながらも延寿えんじうから珠河しじがにたどり着き、そこから汽車に乗りました。

今度こそハルピンに行けると思ったが、貨車は反対に進み一面坡に一晚止められ、ソ連兵が入ってきて、

私と一緒にいた母は大変に心配したが、幸いにその兵はよい人だったとみえて、酒を飲みながら歌っているばかりでしたが、こっちはそれどころでなく、子供を泣かせないように恐る恐る小さくなっていました。汽車は牡丹江の途中の山の麓の信号所で止まり、皆が降ろされたが、軍隊から逃げてきた人から、日のあるうちに山を越さねば虎が出るから急ぐようにと言われ、夢中で歩いて峠を越え、横道河子に着き、屋根と煉瓦の壁だけの兵舎に入りました。

そのときは、雨露さえ凌げれば有り難く思ったものです。疲れ切っていたので、泥のように眠りました。夜中に気が付くと、子供の様子が変でした。母乳はわずしか出ず、オムツの取り替えもままならず、水を見つければ口移しで与え、食物は噛み碎いて食べさせましたが、生後八カ月の乳児にはこの上ない過酷で惨めな連日連夜でした。家を出てから二十五日、幼い一生が終わりました。悲しいけれど埋葬もならず、行く先知れない川に水葬するほかありませんでした。

この辺も戦闘が激しかったのか、山の草木もすべて

焼け、所々に土が盛り上がっていました。それから着いた朝鮮人部落で一夜の宿を五、六人が分散してお世話になり、久しぶりに暖かいオンドルで、粟御飯を御馳走していただき、有り難くて涙の出るほどに感謝しました。

二日後に海林に到着したら、ソ連軍の捕虜になり、ある開拓団の農場跡に収容されました。

ここも焼けてはいたが、タンクの中には味噌もあり、トウモロコシが食べごろでした。疲れが出たのか大人の女の方が初めて亡くなり、子供も何人か亡くなり、義姉さんの下の子もここで亡くなりました。数日海林で過ごした後、拉古らこの関東軍の兵舎がたくさんある屋根と煉瓦だけの建物に収容されました。方々から集まった人で何千人もいたと思いました。夜になると広場に行き浪花節など聞きながら涙を流したものでした。

食料はソ連軍から大豆や原穀の高梁などが配給されましたが、病人や子供のため近くの鮮人部落に行き、米を分けてもらい食べさせました。時々ソ連軍が鉄条網の外に出してくれたので、収穫ころの小豆、インゲ

ソ豆、ビートなど取ってきて、食物作りを仕事にして皆で食べました。

飢退治のため、ソ連軍は車の入口に着ていた物全部紐でまとめて置き、グルリと回って（水でした）シャワーを浴びて、出てくるときには着物が消毒されていました。

そのころ、収容所の前の道路を捕虜になった日本兵が通りました。そのとき、鉄条網にへばりつき「山形 いないかあ、福島 いないかあ」と家族や知人を探し、声を限りに叫んでいました。そんなある日、団長や長兄たちの姿を見付けたので泣きながら叫び続けたところ、その行動がソ連の兵に伝わり、目の前で兵隊を休ませてくれました。団長さんが鉄条網に近づきみんなの姿を見て、だれそれが亡くなった。あの人たちと別れたと涙ながらに話し、「決して無茶なことをしたり考えるな。皆が無事で日本に帰り、皆が協力して開拓村造りをやろう」と諭し励ましてくださったので、希望を失っていた私どもには力強い一筋の光明でありました。それから数日して最後の動員で入隊した人たち

は、拉古で避難者に合流し、男の人が増えたので皆も一安心でした。

それまでは、個人又は家族ごとの食事でしたが、開拓団当時の班別に食事をし、これ以上犠牲者を出さずに日本に帰らねばと、団長さんが元気を付けてくださったが、それでも長い間の難民生活で、亡くなる人が絶えませんでした。

北満の十月は寒気が身に染みましたが、ソ連軍の拘束も解かれ、自由に移動できるようになり、南満の方面に行くため、食料には大豆や包米など煎って保存食にして持ちました。雨の降る中を牡丹江駅まで歩き、各部落ごとに二両の無蓋車に乗り、ハルビンにやっと向かいました。私は、父母とは別の車両に乗り、翌朝早く、霧の中を子供が眠っている横道河子を過ぎ、途中どこかの駅に停車したとき、親たちの乗った車両に行って見ました。そのとき父が乗るところでしたが、足が思うように上からずやとでした。お風呂でも入り、ゆっくり休めばすぐ治るんだと言っていました。それが父と交わした最後の言葉でした。今でも鮮明に

思い出されます。

ハルビンに到着した列車が半分に切り離されて、私たちの車両が先頭になり、団長さんや両親たちの車両と別れ、私たちはそのまま奉天に行きました。残された後の人たちは、数日ハルビンで待ち、列車に乗るため駅に行く途中、父は長兄の背中で亡くなったそうです。

奉天に着いた私どもは越冬することになり、五条通りの国際倉庫の建物に入居して、当初は炊き出しなどもあり、炊事当番や配給物の受け取りなど使役をよくやりました。そのうち難民の中に発疹チフスが発生し、次から次と多くの人が亡くなり、菜も手当ての方法もなく全く悲惨な状態でした。

入隊していた義兄も、軍隊から逃れて、新京まで団の人たちを探しに行ったところ、団長さんに出会い奉天に行った者たちを心配して、義兄を奉天に寄越してくださいだったのでしたが、私が連れてきた義兄の子供も、五日ほど前に私の手元で亡くなりました。あんなに待っていた父親とも再会できずに果てた子供の気持ち、姉

との別れといい、義兄のつらい思いを察すると私の身も凍えるほどでした。

その後、新京にも行くことができましたが、内戦が激しく汽車も動かないというので、しばらくの間働きながら様子を見ることにしました。

そのころ、難民たちに豆腐粕など差し入れてくださった三和公司の所で苦力用の部屋を借り、十人ほどが共同生活をやることになり、国際倉庫から移りました。三和公司の方たちも皆で無事に日本に帰ろうと言って親切にしてください、給作り、納豆用大豆の選別など雑用を手伝いました。

そのうち、私は近くの中国人の所に二人で仕事に行きましたが、その主人が強盗に殺されるといふ恐ろしい事件もあり、しばらくしてやめ、その後、露天商をすることになりました。当時の春日町や青葉町通りは日本の商売人がたくさんおり、私も青葉町で鉛やブドウ糖の塊を割って秤売りをしました。ある日、借りていた秤を取られそうになり、後ろを見ている間に、ほかの者に商品を全部持って行ってしまわれる、数人

組の泥棒に泣いたことなど、越冬中いろいろな目に遭いました。

奉天市内でも国民党軍と八路軍の交戦が続いており、負傷兵を近くの小学校に運んで行くのを見かけることも再三ありました。私も発疹チフスにかかり、一カ月ほど病床にあり、一時は生死をさ迷いましたが、一緒にいた方々のお陰で命拾いをしました。そして何とか生き延びて春を迎えることができ、ようやく日本に引き揚げることに決定しました。

少しは女らしくせねばと、軍服の有り合わせを開襟のように、衿には白布を縫いつけ、袖口はカフスの丈も詰めてジャンパー風に直して着るのが精いっぱいのおしゃれでした。五月十三日、北奉天駅の一カ所に集合し貨車に乗せられて壺蘆島に向かって出発、八カ月の奉天の生活のこもごもの思いを残し、別れを告げたのであります。

所々に立つ楊柳の木のある大陸を走り、壺蘆島について四、五日滞在してから、いよいよ乗船となり、はためく日の丸の旗を見てどんなに感激したことかしれ

ません。途中の海上も無事で佐世保に入港した船の上では「国破れて山河あり」と言う声も聞かれ、胸に込み上げるものがありました。上陸したとたん足も軽く、故郷の土を踏みしめ、やっと帰ることができたと皆で抱き合はんばかりの喜び、それが昭和二十一年六月六日でした。

収容所にて何カ月かぶりで風呂に入り、一度ぐらいいでは垢も落ちませんが、さっぱりした気持ちで調査、注射、手続など二日間を過ごし故郷に出発、大阪までは奉天越冬組の団の者は一緒にしたが、福井、福島の人は北陸線へと別れ、私は義兄と共に福島会津の主人の実家に行き、初めて姑にお会いしました。姑は早く主人を亡くし、四人の男の子を育て苦労されたそうで、優しく迎えてくださいました。実の娘のように食物から着衣に至るまで、内地も物資不足の中を工面してお世話になり、生きて帰国できたことの幸せを実感し、陰ながら感謝したのでした。

八月になって、新京越冬組の人たちが舞鶴港にて、船中でコレラ発生のため上陸できないでいるとの便り

がありました。先に帰国していた団員の人たちが連絡し合って、後続の人たちが帰国したら落ち着く場所として、内原の義勇軍宿舎に収容をお願いする手配を、義兄も仲間と講じていたようで、九月九日に上陸帰還した新京越冬組の人たちが、真っ直ぐ宿舎に落ち着くことができました。私も会津若松から内原に行き、一年ぶりに会った皆さんと積もる話を涙ながらに語り合いました。

宿舎生活は、共同炊事と付近の畑を借りて、秋野菜を作ったり、援農といって河和田村の農家に収穫の手伝いに通い、一日に一貫目のサツマ芋をいただいでいました。再入植地の目星がついたところに、初めて郷里に帰る許可が出て交代で実家や親戚に帰国挨拶に出発しました。

団長さんたちの奔走により、県南の菅生沼干拓地に再入植が決定したので、二十一年十一月十日に第一陣が菅生村に入って宿舎の準備にかかりました。地元の区長さんの厚意で集会所を借りるやら、内原から持ってきた天幕を数張り設置して住居としましたが、内原

で支給された鍬、鎌、スコップの農機具と、布団、毛布、鍋釜、食器の生活道具など差し当たり必要な物以外は、みんなが郷里からもらってきた多少の持物だけで、本当に身軽な裸一貫の再開拓のスタートでした。

時期遅れながら早速小麦を蒔き付けるため、開墾にかかる一方で、内務省の堤防工事に出てトロッコ押し、男女一組になりサツマ芋弁当ですきっ腹を抱えて働きました。履物は男の人が夜中に焚き火を囲みながら編んだ草鞋わらじを履いて、寒中でも素足で朝霜を踏んで出掛けました。食料も大勢ですから大変でした。沼でとった貝、蛙や蛇まで食べられる物なら手当り次第食べました。時には、地元の人たちからいただいた差し入れをどんなに喜んで食べたか、地元の方々の援助により冬がやっと越せました。

二十二年春から、流作地の開墾に私も十人ほどと天幕に泊まりながら野火をつけ、背高く茂った茨の株根っこを伐り、一本の枝を持ち「ヨイシヨ、ヨイシヨ」と一カ所に積んで焼いた後、鍬で掘り起こしました。焼け跡の蝸牛をフランス料理と言いながら食べたたり、海

老蟹と馬鈴薯を煮て主食にするなど、栄養不足の体も若さで頑張れました。

流作の作物は見事に育ち、里芋も背丈ほどに伸びましたが、九月にはキャサリン台風による鬼怒川、利根川の氾濫で流されて作物は全滅しました。

農地を広げ春に蒔き付けた作物も、秋には流され、収穫のない年が、その後も五年続きましたが、組合では外部の建設請負をはじめ、味噌、醤油、搾油、竹細工など農産加工をして資金を稼ぎ、生活費に充てました。家畜も導入し、緬羊も飼育したので、私はスピードスパンの講習に白河へ二十日ほど行きました。私どもの作った毛糸は余りお金にならなかったようですが、物不足のそのころは土産物として喜ばれました。

二、三年たつと抑留者の方や戦地の復員者、それに独身者の結婚で組合員は増えていきました。

消息不明の方も次第に判明するので、私も毎日主人のことが気がかりでした。そんなとき、義兄から今日まで待ってくれたが、種々の状況を考えると生存の見込みがないと思うから、新しい道に出直してくれとの

話がありました。今まで待ったのだから、もうしばらくと申し固辞していたのですが、高橋副組合長にも強く勧められ、そのときは心ならずも山形から入植して間もないので、顔も知らないまま、組合の皆さんに今の主人との結婚式を挙げてもらいました。この人も義勇軍に参加し、満州からシベリアに抑留され、帰国すると開拓を続けたいと希望し、山形県庁の斡旋で大八洲開拓にきた方でした。昭和二十五年の結婚でした。

流作の水害地ばかりの開拓では将来がない、との関係者の皆さん方の御心配により、大井沢地区の山林も開放していただき、昭和二十四年から開墾が始まったので、その台地に私どもも流作から引っ越し、主人は建築、私は耕作の仕事を主にやりました。

移転後、昭和二十六年七月に長女、二十八年一月には長男も出産したが、早産により体重が軽く、やっと乳を飲むほどで案じていましたが、大病もせず成人してくれました。

二男が産まれた三十年の秋に、十年近く続けた共同から個人経営に移行することになり、共同中の財産を

配分するとともに、借金も背負ってスタートしました。

まずは食料をと思い、早速蕎麦を蒔き付けました。

家畜は八カ月ぐらいの乳仔牛が当たりましたが、飼料も十分でないが検査の結果、結核と分かり屠殺しました。家畜保健所の方のお骨折りで数万円の代価がもらえたので、生まれて十五カ月ほどの仔牛を買うことができました。しかし、なかなか受胎しないので飼料不足と思い、保有米を売り大豆粕や魚粉を求め与えて、ようやく妊娠出産した仔牛は牝牛でしたが、酪農第一号の乳牛は随分働いてくれたので助かりました。その後も牝牛ばかり生まれ、一向に頭数が増えないので、他県から乳牛を導入し酪農家を目指し、二人が精いっぱい働きました。しかし無一文からの出発ですから、生活も仕事も思うほど進まず、子供たちにも苦勞をかけました。長女が弟たちを見てくれますが、夕方私たちが遅くなると汚れた体のままゴロゴロして眠っておりました。

そのころの現金収入は、二十羽ばかりの雛から育てた鶏の卵を、五日ごとぐらいくる卵屋に売った代金

が最小限のお菜代でした。体を構う暇もなく流産を二回したが、それでも休むことはできない。次の日からまた仕事でしたが、若いながらも良く持ちこたえたと振り返っています。その苦しいころは主人の実家から（米の統制の時代ですから）義兄さんが移動届けまで出して米を送ってください、その米は子供たちに食べさせ急場を凌いできました。

医療についても、満州開拓時代医者になった加藤先生が組合にこられ、無料で診察をしてもらいましたが、先生が東京に行かれた心細いとき、守谷町の染谷先生と歯医者のお二人には大変お世話になり、お金は有るとき払いでも嫌な顔もなさらず、見ていただいた苦しいときの御親切は生涯忘れることはできません。

冬期間、主人は東京に出稼ぎに通いました。当時、近くでは働く所がなかったので、朝は四時ごろ起きて搾乳し、その乳缶を自転車に積み守谷駅の近くにある集乳所に届け、その足で電車で東京に行きます。その自転車も借金してようやく買求めることができました

た。当時は少しでも多く現金収入をと、秋の蒔き付け作業を一日でも早く終わらすため、夜中まで働いたものです。

私もその間は乳牛の世話にリヤカーで畑から飼料を運び、休む暇も惜しんで働いた。苦しいなり貧しいなりの生活でしたが、子供たちも無事に育ってくれて小学校に入学、米の飯だけは弁当に持たせることはできたが、お菜まではお金も手も回り兼ね、子供たちには不自由させました。

末の子が三年生のころ、脱脂粉乳の当番に学校に行つたとき、上履きがぼろぼろの我が子を見て、子供なりに分かって新しい物を買ってくれとは言わないでいるのに気付き、かわいそうに思いました。

冬作は草に負けないから収穫があるので、目一杯大麦を八反、小麦は地力がないので収穫前に立枯れすることがあるため三反ほどにして、その他家畜蕪や燕麦など飼料を耕作しました。機械のないときですから、天候を見ながら夜昼もない。鎌で刈り脱穀は足踏み、隣近所の人と助け合いました。にわか雨や雷雨のとき

に乾かしてある麦の取り込み、金や物の貸し借り何事もお互い気兼ねなく頼んだり、言ったり助け合うことができた。その点は何より有り難いことでした。

そのうち子供たちも中学卒業。そして長女は内原の国民高等学校に、長男も同校に進みました。そのころは大変ですから物売りには居留守をつかい、朝焼いた塩麴の残りは夜の実だくさんのごちゃ煮にと、金と手をかけずの食事でした。組合も大変な中で会計の梅津さんが教育するには時期があるんだと言って、方方から都合して学資を出してくださったので、長女も長男も卒業できました。長男は酪農を継ぐことになり一息ついたのですが、償還しながら酪農だけではまだ大変で、主人は丸井加工に働きにいき、忙しいときは手伝ってくれました。他は私と長男で乳牛を飼いました。

そんなころ、長女を嫁にと言われ、組合長の奥様の世話で卒業して二年目の組合の青年との話が持ち上がって二十日ほどで嫁入りしました。何も知らない仕度なしでも皆さんに喜んでいただいたのでした。若い二世も青年部を結成して活動した中に、長男も参加し酪農

にも慣れてきました。二男も土浦日大高校に入学しました。

昭和四十五年になると、私どもの開拓地が守谷町の都市開発による住宅公団の造成用地として買収されることになり、組合事業として移転工事が進められ、現在の菅生町に移ってきました。

集落二十一戸全戸が移転を終えたのは四十七年でした。住宅・畜舎の建築用地の買収整備など二年間は大変でしたが、耕地も倍に増え建物なども大きく新築して、以前より酪農を拡大できたので、働きの中心となった長男も張り合いができました。その長男も五十二年に結婚し、嫁いできた相手と仲良くやっていますので、後継者の心配がなくなったことは、親としても大きな安心であります。私の母も八十三歳の天寿を全うし、長兄一家に見守られて晩年は幸せな一生を送り、最期の旅立ちとなりました。

五十三年には二男も専門学校を卒業後、建築の道に進み良縁を得て三人とも巣立ち、孫も九人曾孫も今年中には三人を数えます。

長男の息子も高校を卒業して、酪農実習生として北海道に行っており、次代の酪農を継いでくれるようです。

「人生七十古来稀なり」と言う古稀を目前にして、過ぎ去った歳月を思うと、今このような家族と共に生ある幸せに感謝せずにはおられません。

反省と後悔の多い人生ではありましたが、自分なりに精いっぱい生きてきたことに誇りを持ち、幼くして亡くなった子、戦争というあつてはならない事変に命を落とされた人々、志半ばにして逝かれた方々の御冥福をお祈りして、季節の花を作りお墓や仏壇に供えています。皆さんの善意と愛情に支えられた生活をしています。今後は若者たちの健康を願う限り精いっぱい生きたいと思っています。

【執筆者の横顔】

山形県の郷里から長兄が入植した、北滿の大八洲開拓団に昭和十五年に一家と共に移住し、弥栄在滿国民学校高等科を卒業した後、団員である青年と結婚し、

開拓農業に従事していた。ところが戦況が敗戦に傾きかけた昭和二十年の夏、主人は召集を受け入隊した。

それから間もない八月には、開拓団と訣別する日が訪れ、避難中に愛児をはじめ義姉とその子供を亡くし、約一カ年の悲惨な流浪と越冬生活の末、九死に一生を得て満州から引き揚げた女性の一人である。

帰国後、大八洲開拓団の生き残りが国内開拓を志し、茨城県東茨城郡内原に待機中の同士の傘下に単独加わり、昭和二十一年十一月菅生村に再入植した利根川沿いの常習水害地である、菅生沼開拓に辛酸をなめ、続く山林の開墾にも苦難を重ね頑張り抜いてきた仲野さんは、開拓女性の範である。

応召した夫の無事を祈り、復員を待ち続けてきたその念願も空しく、戦死したため悲しい思いを秘めながら、現在の主人と一から出直し、貧しく苦渋な開拓生活が続けながらも、皆と協力して酪農経営の基盤を築き上げたのである。

農作業に追われる毎日で、子供の養育どころではなかったが、今は三人とも成長してそれぞれ家庭を持ち、

元気でやっており、特に長男夫婦は後継者として厳しい現下の農業情勢にもかかわらず、酪農経営の持続発展に専心している。

たのもしい家庭は、若くして開拓の主婦として長年にわたり苦勞し努力してきた結果にほかならないと、その健気な精神に深く敬意を表するとともに、今後ますますの健康と幸福が訪れますよう心から願う次第です。

(大八洲開拓農業協同組合)

代表理事組合長 石田 時雄)

満州引揚げから再開拓への道

茨城県 田中 栄一郎

昭和二十一年十月の末、米沢市七軒町の父方の伯母須藤とみ宅の玄関前に、みすばらしい姿で立つ三人の男の子は、栄一郎(十五歳)、弘雄(十三歳)、照夫(十二歳)の兄弟である。